



【口絵4】 樹皮布の織機を構えた女性の絵葉書。表面の下端に「函館大盛堂製」と印刷されており、3分の1が通信欄となっていることから、小島大盛堂が1907（明治40）年から1918（大正7）年の間に発行したものとわかる。連続して撮影されたと考えられる写真が多数のこされてお、それらは1890年代前半には流通していたことがわかっている。（筆者蔵）

【口絵3】 これも『北海道土人風俗画』収録の1枚。女性は口絵1中央に立つ人物と同一で、服装も同じである。同じ場所で男性のみがポーズをとったもの、口絵1右から2人目の女性が立つものなど、連続して撮影された写真が多数確認できる。文中の「神居」には「じんきょ」とルビが振られているが、本来はアイヌ語のカマイ（神）を意図したものであろう。（筆者蔵）

写された側の歴史へ

「アイヌ風俗写真」の誕生

維新を翌年に控えた一八六七年七月（慶応三年六月）、箱館港に停泊していたイギリス軍艦サーペント号の乗員フレドリック・ウィリアム・サットン（一八三二～一八八三）が、同地でアイヌの一行を数枚の写真に収めた^{〔図1〕}。撮影の場を設定したのは、当時箱館を拠点として貿易商を営んでいたイギリス人トーマス・ライト・ブラキストン（一八三二～一八九二）で、彼はのちに被写体となったアイヌ数人と石狩川の下流域で偶然再会し、そのうち一人が「サツポロ（札幌）のアイヌの首長（chief of the Satsporo Ainos）」であることを知ったと書きのこしている^{*}。アイヌはいずれも華やかな絹の打



【図1】 2人のアイヌと引率者と推定される和人。
（日本カメラ博物館蔵）

ち掛けの上に陣羽織をまとった盛装であることから、数年に一度の謁見礼「御目見得」のために和人に引きつれられ遠く石狩から奉行所がある箱館を訪れていたところを、撮影のために呼びとめられたものと見られる。これがアイヌの姿をとらえた写真として現在知られているもののうち、時と場所が詳細に明らかにされている最古の資料である*。

このころ、ヨーロッパ諸国では進化論の流行により「人種」への関心が高まり、世界各地で関連資料の収集が進められていた*。そうした中、一八六五（慶応元）年には箱館駐在のイギリス領事館員らが郊外の森村と落部村でアイヌの墓地を暴き、計一七体の遺骨を持ち去るという事件を引き起こしていた*。サットンが短い滞在期間中にアイヌを撮影することとなったのも、こうした人類学的な視線と無縁のものではなかっただろう。このとき撮影された写真は、横浜に住んでいたイギリス人写真家フェリーチェ・ベアト（一八二八〜一九〇九）の手にもわたり、うち一枚はベアトが刊行した写真集『日本の風景』（Views of Japan）に「アイヌの首長たち」（Aino Chiefs）と題して収められ、広く世界に知られるところとなった。

明治をむかえ函館と名を改められたこの地では、幕末にロシア人から写真の技術を習得していた田本研造（一八三二〜一九二二）、その弟子井田倅吉（一八四五〜一九二二）らが写真館をひらく。彼らが手がけたアイヌを被写体とする写真は、和人がそれまで「化外の民」の姿を伝えるものとして好んできた「アイヌ風俗画」を美術の分野に追いやり、とって代わった*。一九世紀後半から二〇

世紀初頭にかけて日本を訪れた数多くの外国人旅行者や研究者も、こうした写真を入手し本国に持ち帰っている。

その後、印刷技術の発達にともない写真集が普及し、一九〇〇（明治三三）年には私製葉書の発行が許可され、写真絵葉書が手軽かつ高精細の印刷物として高い人気を博すようになる。流行に乗った北海道各地の写真館や書店がアイヌを題材としたものを次々に製作し、「アイヌ風俗」、「土人風俗」などの名を付して流通させていった*。この時代、帝国日本の国策により本州以南からの移民導入が強力に推しすすめられたことにより、幕末にわずか六万人にすぎなかった北海道の人口は急増し、一九〇一（明治三四）年に一〇〇万人、一九一七（大正六）年に二〇〇万人、一九三五（昭和一〇）年に三〇〇万人を突破する*。約二万人のアイヌは先祖伝来の土地に住みながらにして圧倒的な少数者となり、政策による圧迫と和人移民による激しい人種差別にさらされていった。一九世紀末以降、アイヌを生存競争に敗れた「滅びゆく民族」とみなす言説が広まる中で、旅行者はその姿を一目見ようと集落に足をはこび、研究者は消滅の瀬戸際にあるとされた「固有の習俗」を記録するようになる。アイヌの姿を収めた写真や絵葉書は、北海道の「珍奇」な土産物として定番商品の一つとなったのみならず、学術研究の「標本」としても珍重され、ときには学校教科書にも引用されて、日本社会におけるアイヌのイメージを形づくっていった。本書では、これらアイヌを題材とした写真や写真絵葉書を「アイヌ風俗写真」と総称することとする。



【図2】 家屋のかたわらに座る男女。背後の祭壇は口絵2に写るものと同一である。祀られた熊の頭骨が家と反対側に向けられているのは、噴火湾沿岸地域の特徴である。家屋の構造から、この写真が裏焼きであることがわかる。(北海道大学附属図書館蔵)

【図3 / 左頁】 小島大盛堂が発行した写真絵葉書の一例。袋に記された「12.25」は12枚組、定価25銭であることを示す。同社の出版図書目録によれば、1907（明治40）年に『北海道土人風俗絵端書』、1910（明治43）年に『北海道土人風俗絵葉書』第一集、第二集が販売されていた。袋の記載やセットの内容が一部異なるものがあり、長期間にわたってアレンジを加えながら販売されていたことがわかる。下は口絵4と連続して撮影された写真が使用されている。(函館市中央図書館蔵)



CUSTOMS OF HOKKAIDO TRIBE.

(6) 第二巻 俗風人士道海北

再生産され続けるアイヌのイメージと課題

こうして生み出された「アイヌ風俗写真」は現在、国内外の博物館や図書館、愛好家のコレクションの中に膨大な量がのこされており、アイヌの姿を示すものとしてくり返し引用され、漫画などの創作物の中にも、それらを参考に描かれたものをしばしば目にする。アイヌのイメージは世紀を越え、今も再生産され続けているのだ。

しかし、当然のことながらそれらの写真は被写体となった人びとの暮らしを「ありのまま」にとらえたものではなく、慎重な取り扱いが必要とされる。近年では、おもに写真史の分野において、過去に「文明」を自認する側の人びとが「未開」、「野蛮」とみなした人びとに対し向けた「まなざし」に関する批判的な考察が数多くなされるようになり、対象の一つとして「アイヌ風俗写真」に言及したものもなくなはない。ただし、それらの研究の主要な関心はあくまでも「写した側」、「まなざした側」の営為にあり、「写された側」、「まなざされた側」であったアイヌの状況については、いずれも瞥見の域を出ていない。他方、歴史学や文化人類学の分野では、これまで「アイヌ風俗写真」の資料的な可能性を指摘する声こそあったものの、*実際にそれらを対象とした研究はきわめて乏しく、むしろ十分な検証がなされないまま漫然と利用される状況が続いてきたといっている。の

こされた「アイヌ風俗写真」にオリエンタリズム、エキゾチシズムといった「写した側」の限界を見いだすことはむずかしくないが、そのような紋切り型の批判にとどまることなく、「写された側」にいたアイヌの歴史に目を向けた読み取りの深化が求められている。

これまで「アイヌ風俗写真」を対象とした研究が進展してこなかった背景にはいくつかの理由があるが、しばしば指摘されてきた点として、のこされている資料の多くが基礎的なデータを欠いていることが挙げられる。冒頭で紹介した事例のように、ある程度の検討が積み重ねられ、撮影の経緯が詳細に明らかにされているものは、実のところまだまだ例外的である。そもそも「アイヌ風俗写真」が撮影された当時、「アイヌ風俗」はわずかに残存している「古代風俗」とみなされていたため、それが具体的にいつ撮影されたものかなどは、ほとんど問題にされることもなかった。

のこされた資料から何らかの歴史的事実を導き出そうとするならば、まずは資料の相互比較や各種の記録との照合によって、撮影された時と場所を一つひとつ絞りこんでいかなければならない。これはいわば、時間軸と空間軸を欠いた「固有の習俗」の「標本」として切り取られた写真を、改めて正確な座標に置き直していく作業だ。

研究が進んでいないもう一つの理由は、そこに写されているものの「真正」さに深い疑いの目が向けられてきたことにある。実際のところ、とくに二〇世紀以降に発行された「アイヌ風俗写真」には、観光地で活動した著名な人物を被写体としたものも多く、そうしたもののおおまかな年代や

場所の特定はさほどむずかしくない。しかし、それらは撮影のためのポーズ、あるいは「俗化」した観光地や興行の場での「見世物」にすぎないとみなされ、「日常生活ではない」、「現実の姿を写したとは言えない」などとして、まがい物のように扱われてきた。^{*}端的に言って、まともな研究には値しないと考えられてきたのだ。

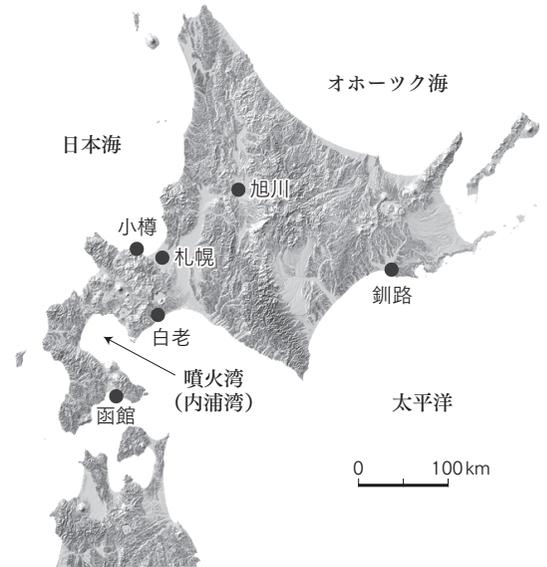
そうした見方に立てば、のこされた道はより古い時代の、より奥地の、変容以前の「プリミティブ」な姿をとらえた資料を探索するほかなくなってしまう。しかしながら、世界のあらゆる文化と同様に、アイヌの文化もまた歴史の中で絶え間ない変化を経験してきた。たしかに、のこされている「アイヌ風俗写真」の多くは観光地や興行の場でカメラを前にポーズをとったものであり、明らかに過度な演出が加えられたものも少なくないが、観光業や興行への従事もまた、近代以降におけるアイヌの歴史の一つの側面にほかならない。それらも「日常」の一端であり、「現実の姿」の一部なのだ。重要なのは、アイヌがいかなる状況の下でそうした写真に収められていったのかを明らかにしていくことだろう。ただし、この問題には「アイヌ風俗写真」のみを分析対象として決して解決できない領域がある。のこされているのは撮影者が興味を惹かれた特定の側面——すなわちいかにも「アイヌらしい」と見て取ったもの、あるいは意外性を見出したもの——が切り取られた結果であり、そこから外れるものは最初から被写体として選ばれていない。アイヌのうちどの地域の、どのような人びとの、どのような側面が写真に収められたのか。それを知るためには、何

が写されたのかということと同様、あるいはそれ以上に、何が写されなかったのかに十分な注意を払わなければならない。

「アイヌ風俗写真」を歴史につなぎ直す

本書では「アイヌ風俗写真」が撮影された時と場所を特定し、被写体となったアイヌがどのような状況に置かれていたのかを時代を追って読み解いていく。それは一枚一枚の写真に丁寧な注釈を付していくことにより、生きながらにして「滅びゆく民族」の「標本」として扱われ、尊厳を奪われた人びとを歴史の中につなぎ直していく作業ともいえる。

軸とするのは、北海道南部の渡島半島^{おしよ}、とくに噴火湾^{ふなづみ}（内浦湾）の沿岸である^{図4}。このようにある程度地域を絞るのは、一つにはかぎられた紙幅で膨大な資料群を扱うことが困難だということもあるが、近代のアイヌが置かれていた状況には地域差がきわめて大きく、精度の高い記述をおこなうためにはそれぞれの地域に即した検討が不可欠だからである。なかでも噴火湾沿岸という地域を選択した理由は、近代初頭の時点で北海道一の大都市だった函館と至近の距離に位置することにかかわっている。函館は国内でいち早く写真館が開かれた日本写真史の出発点の一つであるとともに、書店や文具店、新聞社などが数多く存在していたため、周辺に暮らしたアイヌに関する資料



【図4】 噴火湾の位置

が豊富にのこされている。これほどの高い密度で近代全体をカバーする情報が得られる地域は、決して多くはない。

こうしたアプローチをとる本書は、写真を切り口とした噴火湾沿岸に生きたアイヌの近代史という側面も帯びる。それは、これまで多くの概説書に記されてきたような「伝統文化」の単なる紹介

や、二〇世紀後半からもはやされてきた「自然と共生する人びと」といった幻想をくり返すものではない。ましてや、「滅びゆく民族」の「衰亡史」、「哀史」をくり返すものでもない。近代という時代のなかできわめて苛酷な状況に追いこまれながら歴史をつないできたアイヌの姿を、さまざまな資・史料に即して冷静に跡付けようとするものである。

本書では数多くの写真資料を扱うが、明らかに被写体の尊厳を損なうものはあらかじめ対象から除外している。また、被写体となったアイヌの氏名については、すでに町村史や先行研究によって広く知られている人物のみを記した。一方、引用文中に頻出する「土人」や「旧土人」といった差別的な単語や、明らかにアイヌを蔑視した表現については、歴史資料としての性格に鑑みてあえてそのままとした。そうした記述の数々は、日本社会のマジョリテイである和人が、かつてアイヌにどのような態度で向き合ってきたのかを示す動かぬ証拠である。将来へ向けた教訓としてとらえていただければと思う。